

**【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 6章3～11節**

<sup>3</sup>それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。<sup>4</sup>わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。<sup>5</sup>もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。<sup>6</sup>わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。<sup>7</sup>死んだ者は、罪から解放されています。<sup>8</sup>わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。<sup>9</sup>そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。<sup>10</sup>キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。<sup>11</sup>このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

**【福音書日課】ヨハネによる福音書 20章1～18節**

<sup>1</sup>週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。<sup>2</sup>そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」<sup>3</sup>そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。<sup>4</sup>二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。<sup>5</sup>身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。<sup>6</sup>続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。<sup>7</sup>イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。<sup>8</sup>それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。<sup>9</sup>イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。<sup>10</sup>それから、この弟子たちは家に帰って行った。

<sup>11</sup>マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を

見ると、<sup>12</sup>イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。<sup>13</sup>天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」<sup>14</sup>こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。<sup>15</sup>イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」<sup>16</sup>イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。<sup>17</sup>イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行ってみて、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」<sup>18</sup>マグダラのマリアは弟子たちのところへ行ってみて、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

## 天使が見える！【こども説教のために】

イースターおめでとうございます。主のご復活を祝うときです。この日、昔の人はこう挨拶を交わしました、「主は、よみがえられました」、「主は、本当に復活なさいました」と。わたしたちも、同じように挨拶を交わす歌をうたってこの礼拝を始めました、「主はよみがえられた、ハレルヤ」と。

ご復活の主と最初にお会いしたのは、マグダラのマリアという女の弟子です。マリアは、十字架で死なれた主イエスが葬られた墓を訪ねていました。お墓参りに行ったのです。葬られて三日目、**週の初めの日**つまり日曜日の朝でした。ところが、墓に行ってみると、入口を塞ぐ石が取りのけてあったのです。途方に暮れて泣きながら墓の中を見てみると、そこにあるはずのご遺体がありませんでした。かわりに見えたのは、**白い衣を着た二人の天使**です。天使は、マリアに言いました、「婦人よ、なぜ泣いているのか」。そう問われて、答えているうちに、マリアは墓の外に誰かがいることに気づきました。振り返って話してみると、その方が主イエスだったのです。

イースターの天使は、マリアを導いて、ご復活の主イエスと会うことができるようにしてくれました。まだご復活の主イエスとお会いしていない人には、まずイースターの天使が現れてくれるでしょう。皆がご復活の主とお会いできるようになるためです。わたしたちが、イースターの日、「主はよみがえられました」と挨拶を交わすことができるようになるためです。

## 「だれを捜して」

イースターの朝、どこの教会でも、主のご復活を祝う者たちが挨拶を交わしていることでしょう、「ご復活おめでとうございます」と。

イースターの挨拶を交わすことができるのは、なんと幸いなことかと思えます。挨拶を交わし、祝いの礼拝にあずかることができるのです。「主はよみがえられた」と、誰に気兼ねすることもなく賛美を歌うことができます。イースターの朝、互いに集まることなしには、祝いの挨拶を交わすことも、喜びの歌をうたうことも、できなかつたでしょう。

ここで久しぶりに会う者があるかもしれません。初めて挨拶をする者もあるかもしれません。新しい仲間、友を与えられることも、喜びの一つです。だれも、イースターの祝いの礼拝においてになられながら、何の「出会い」も無しにお帰りになられるようなことがあつてはなりません。今日、わたしたちは、「出会い」のためにここに集められているのです。だれにも「出会う」ことができないまま、ここから立ち去られる方があるのを知っていたら、放っておいてはいけないのです。

マグダラのマリアは、その日、墓の中で主とお会いすることを願っていました。金曜日に十字架の上で息を引き取られた主イエスは、その墓に葬られているはずでした。亡くなられたとはいえ、そのご遺体はそこにあるはずでした。大切な方が葬られているはずの墓を訪ね、そこで亡き方とお会いしようとするというのは、何も特別なことではありません。生前の面影は失われているとしても、その人が存在していたことを示すもの、ご遺体なりご遺骨なりがあるところで、その人とお会いできるのです。けれども、その墓の入口が開け放たれていたら、どうでしょうか。そこにあるはずのご遺体がなかったとしたら、どうでしょうか。

わたしの母方の祖父の墓には、骨壺は納められていますが、中は空です。戦時中、フィリピン・ルソン島の戦闘の最中、山中で亡くなったとされていますが、遺品ひとつ戻って来てはいません。国からの通知が一通、その骨壺には納められていると聞きました。祖母は、キリスト者でしたが、生前、靖国神社に通っていました。そこに祖父の名が記念されているからです。墓に行っても何もなければ、墓を参る理由はなかつたのでしょうか。戦友たちと共に名が記念されている場所で亡夫を偲んだのも当然だったのでしょう。

マリアは、天使から問われました、「だれを捜しているのか」と。「わたしの主」を捜しているのです。「あの方」を捜しているのです。けれども、「どこに置かれているのか」分からないのです。あのお方とどこでお会いしたらよいのか、分からないのです。マリアは知りたいのです、あのお方がどこに置かれているのか。できれば、あの方を引き取りたいのです。

## 「主を見ました」

イースターの朝、マリアと共にわたしたちが見ているのは、空の墓です。主のご遺体が置かれていたはずの、しかし空になった墓です。空虚な墓に、しかし、天使たちが座っています。ご遺体の代わりに、天使たちが座って、わたしたちに語りかけてくるのです、「**なぜ泣いているのか**」と。

いいえ、わたしたちは泣いていません。わたしたちは、喜んでいます。ここに集うことができ、喜んでいます。友と会い、祝いの歌をうたい、新しい出会いを与えられる期待を胸に、喜んでいます。泣いていません。

でも、泣いていたのです。一人、泣いていたのです。だれにも見られないように、泣いていたのです。お会いできなくて、見つけれなくて、途方に暮れて、泣いていたのです。

「あなたは泣いている。なぜ泣いているのか」。

でも、もう泣くことはありません。名を呼んでくださる方があるからです、「マリア」と。それに応えることができるからです、「先生」と。それは、皆さんの前に立つ、「白い衣を着た天使」ではありません。天使の声を聴いた者は、後ろを振り向くのです。空虚な墓の中ではなく、自分の立つ墓の外を見るのです。そこに、出会うべき人がいるのです。自分の名を呼んでくれる者がいるのです。それに応えて、呼びかけることが許されている者がいるのです。挨拶を交し合うことが許されている者が、いるのです。

それは、わたしたちがさがりつく相手ではありません。見るべき相手です。向き合うべき人です。

その人に、わたしは生かされているのです。わたしの命は、その人と共にあるのです。命が生かされ合うために、出会わされているのです。その人のことを、危うく墓の中に葬り去るところでした。そこに閉じ込め、思い出に封印してしまうところでした。けれども、そうするために、その人と出会わされたわけではありません。これから、命あるかぎり、互いに生かされ続けるために、新しい出会いの命を生み出し続けるために、出会わされたのです。

主イエスとお会いしましょう。ここで、後ろを振り向いて、そこに主がいらっしゃることを確かめましょう。ここに、主はいらっしゃいます。主と結ばれた人々がいらっしゃいます。主が命の交わりを今も続けてくださっている人々が、ここにいらっしゃいます。この人々と共に、主はいらっしゃるのです。

「わたしは主を見ました」。そうです。「わたしも主を見ました、皆さんの中に」。主はよみがえられたのです。本当にご復活されたのです。今も生きていらっしゃるのです。新しい命の出会いを、今日も一つ加えてくださっているのです。「わたしたちは、主を見えています」。